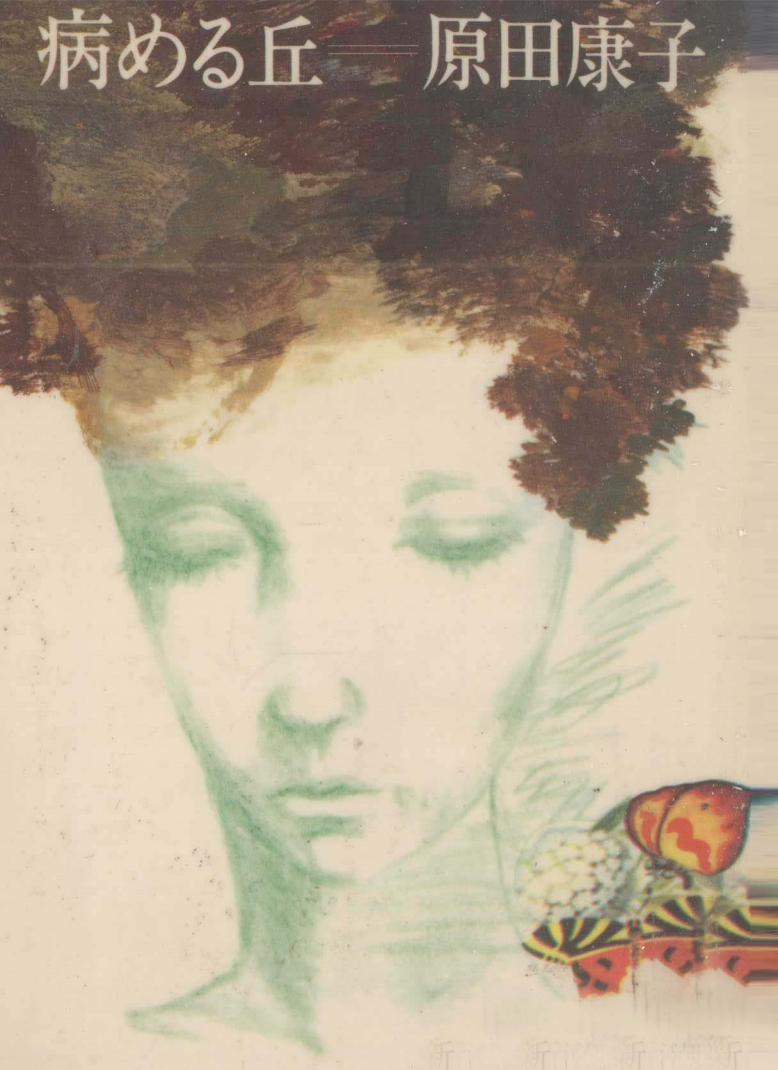


病める丘——原田康子



や おか
病 め る 丘

定価はカバーに表示してあります。

新潮文庫 草 114 C

昭和五十年七月二十五日 印刷
昭和五十年七月三十日 発行

著 者 原 はら 田 だ 康 やす 子 こ

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式會社 新 潮 社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一
編集部(〇三)(二六六)五四二
振替 東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替いたします。

印刷・錦明印刷株式会社 製本・錦明印刷株式会社

© Yasuko Harada 1975 Printed in Japan

新潮文庫

病める丘

原田康子 著



新潮社 版

病
め
る
丘

一 章

八時近くなつてから、日課の夜の散歩をするために、私はボルゾイ種の犬を引いて庭へ出た。霧が出はじめていた。乳色の薄い霧は、前庭の深い夏木立のあいだを縫いながら丘の下から這い上つて来て、私のからだにもさつと巻きついた。うたた寝のあとの私の肌に霧は冷たく、私はようやく目を醒ましたような感じがした。するとまた、私の心をあの小さな痛みが通り過ぎた。仮眠から醒めたあとだけでは限らない、夜、犬を連れておもてに出るたびに、私ははつとして立ちすくみかけるのだ。私を立ちすくませるものは、霧の場合もあり、風の場合もある。小雨が私をはつとさせ、雪が私を立ち止らせることもある。そのとき私は、たとえば、私は今日も生きていたらしいというような感じを受ける。心をよぎる小さな痛みとはそれである。

やがて私は、私自身の声を自分の耳で確かめようとするように、低く犬の名を繰返して呼びはじめる。

「イワン、イワン……」

この時刻になると、私に連れ出されることを知っている犬は、私の声を聞くとやにわに走り出そうとした。ボルゾイ種の犬はシェパード種の犬より一周り大きい。白に黒の斑点のある毛はふさふさと豊かで、脚は仔鹿のように長く、一見非常に瀟洒な犬だが、大柄なだけに力も強い。私

は犬に引きずられるようにして、前庭のなかの道を降りて行った。

私の家、安西家は町の中心部から十キロほど離れた丘の斜面に建っている。附近一帯は角ヶ丘と呼ばれる滑らかな丘陵地帯である。およそ九十年ほど昔、この地方に少数の土民しか住んでいなかった頃、この辺りの丘には雄鹿の角が夥しく落ちていた、というのが丘の名の由来である。幼少の頃、私は庭の木立や叢の陰に、琥珀色に鈍く光った鹿の角を、屢々見受けたような錯覚に陥った。当時すでに人口六万の小都市に変っていたこの町の郊外に、野生の鹿の角が転がっている筈はなかった。

安西家の前庭は、麓にむかってひろがり、麓の表門は西側の自動車道路にのぞんでいる。逆に建物の裏手はいくぶん高く、沢が落ちこんでいる。また南側の丘は見捨てられた牧場であり、北側は近くの炭鉱の社宅用地である。この春から整地がはじめられ、日中にはブルドーザーのいびきがよく耳に入った。その社宅用地と古い牧場、沢と道路にかこまれた約九千坪が安西家の地所である。

車寄せから表門までは、ほぼ三町あり、この前庭を横切る道はゆるやかな傾斜の上をS字型に大きくカーヴしていた。

私はゆっくり坂を降りて行った。霧のなかで丘は黒く重なり合い、丘の背後の空に町の明りが薄赤くにじんでいた。

私が父の姿をみとめたのは、最初のカーヴまで降りたときだった。父は表門のカーヴを曲ったばかりだった。木立のあいだに、ダスターコートを羽織った父の姿がぼうっと白かった。

霧の流れている夜なのに、輪郭のぼやけた姿を私がすぐ父だとわかったのは、父を見馴れてい

るせいだけではなかった。陽が落ちてから前庭の道を登って来る者は、父か弟の一郎しかないからである。一郎はこの夏の休暇、学校へ出すレポートを取るために町の肥料工場へ実習に通っていて帰りが遅い。しかし父が八時前に帰宅するのも珍しいことだった。

父はひどくゆっくり勾配を登って来た。あまり遅すぎる歩きかたなので、私は父が酔っているのではないかといぶかしんだ。だが酒場から夜更けに帰って来たようなときも、父の足元はすこしも乱れないのである。

父を見つけた犬は一層足を早めだした。イワンは、まるで面倒をみない父にもよくなつていたのである。私の家の三人の家族のうち、飼犬に好かれていないのは一郎だけである。

私は犬に引きずられるままに小走りに坂を降り出した。S字型の、二つのカーヴのあいだは桂の老木の太い根が蛇のように地面に横たわっている。私の記憶に間違いがなければ、桂の根は私の物心のついた頃から、同じ姿で前庭の道を断ち切っていた。この厄介物に邪魔されて、車寄せまで車が辿り着くことはなかった。

ちようどその根のあたりで、私と父は出逢った。イワンが吠えたてながら父の肩に前脚をかけるようにした。父は犬に片手を伸ばしかけ、それから根に躓いてよろめいた。

私はとっさに父のからだを支えた。父のからだの重味で、私も軽くよろめいたが、意外にも父には酔いの匂いはなかった。

「気をつけて」と私は母親のような口調で言った。

「知ってるでしょう、この根……」

「年かな」と父は短く笑った。

父は五十二歳だったが、年齢の割には若い容子をしていた。頬はすっきりと締り、厚い肩とまっすぐ伸びた背には、獅を愛していた頃の名残りがあつた。

私は父と並んで家の方へ引返しだした。イワンは、もどるまいとして拗ねたように啼きだした。その犬の気配に父はいつもの口調にかえて言った。

「お前は散歩だろう」

「いいのよ」

「行つておいで」

私が素直に表門の方へ降りかけると、父は私を呼び止めた。

「一郎は帰ったか」

「まだよ」

「お前は遅くならないんだろうね」

「なにか、ご用？」と私は立ち止つたままきいた。

父は暫く口ごもつてからこたえた。

「いや、たいしたことじゃないんだ」

私は父と別れて再び坂を降りかけた。二、三歩行つてから、私は何気なく振りかへつて父を見た。父はまた不自然なほどゆっくり坂を登つていた。その後姿は私をはっとさせた。私はようやく、父がなにか屈託について、そのことを私と一郎に知らせるために早く帰つて来たのだ、と感づいた。そのときまで私は、父の帰宅の時間の早さなど、さして気に止めてはいなかったのだ。緩慢な足取りをのぞけば、父はほとんど変つた容子などしていなかったからである。

私は犬の首輪から手綱をはずした。犬は白い弾丸のような早さで木立の奥へ消えて行った。私は手綱をしごきながら、小走りに父のあとを追った。父にどんな用事があるのか、私は考えなかった。とにかく、父が改まって私になにか話を持ち出すことなど、長いあいだなかったことであつた。

父が改まった容子で私に話しかけてきたのは三年前、私の縁談が纏れかけていた頃である。

夜おそく、歌を口ずさみながら、外出先からもどつて来た私は、やはり帰宅したばかりらしい父と、内玄関や居間や廊下でよく顔を合わせた。ときたま父は、目顔で私を差し招いてきいた。

「どうするんだ、敦子」

父の言葉はいつも静かだったが、いくらか冷やかなひびきがあつた。また投げやりな感じもした。そして父の表情はきまつて柔和だった。

もともと父は、私と一郎に父親らしい態度で接したことはなかった。父は昔から留守勝ちであり、私たち姉弟の養育は悉く母に任せられていた。父が私の縁談を気にしたのは、私の許嫁が、父の友人、友田立平の息子だったせいである。父は私の将来を案じるよりも、友田氏への義理から心にもなく私に話しかけたのかもしれない。だがまた、私の縁談を多少は気にかけながら、それまでの私にたいする態度を思い合せると、にわかに父親らしい叱責や難詰をするのがためらわれて、表面さり気なく私を問いただそうとした節もあつた。

私の婚約者の友田順次は、私より二つ年上の青年であり、彼と私とは学校時代から許嫁の間柄

だった。真面目で直情な、いかにも青年らしい彼を、私ははじめのうち好いていた。私たちは始終おもてで逢い、結婚を待たずに遠出さえた。

私が友田順次を避けだした理由は簡単である。順次の先輩に、私は心をうばわれてしまったのだ。先輩といつても、私の新しい恋人は、順次より七歳ほど年長であり、すでに妻帯していた。

彼は容貌や身嗜^{みだしな}みに隙のないだけの、平凡な遊び人だった。私が彼に惹^ひかれたのは、長いあいだ付き合っていた青年より、彼のほうが目新しかったからにすぎない。また男が、若い私を捉^{とら}えるに充分な恋の技巧を心得ていたせいである。

私と男は人目を憚^{はば}って逢っていたが、当然順次は私の変化に気づいた。順次は私を問いただし、私をなじった。青年の上氣した頬や、怒りにかがやく目は美しかった。私の心には、再び許嫁への愛着がよみがえった。

いまから思うと、私の日常がきらびやかで愉しかったのは、順次が苦しみだしてからの一時期であつたような気がする。私を愉しませたものは、年上の遊び相手の接吻でもなく囁^{ささや}きでもない、青年の怒りだった。順次が突きつめた美しさを見せるようになってから、愛人は私にとって順次の美しさを見るために必要なだけの存在に変わった。

はなれるかと思うと、またやさしい素振りを示す私の煮え切らない態度は、順次の焦燥を深めていった。私の帰りが遅い夜、彼はよく私の家の居間で私を待っていた。そんなとき、母が彼の相手をしていた。

母は父とちがつて私たち姉弟にはいつもやさしかった。母には心おきなく愛情を示すことのできる対象は、私と弟のほかなかったのだ。私と順次とのあいだのこじれを、しんから氣遣つてい

たのも母である。母は私の仕合せを、私がこともなく結婚し、妻となり母となることを願っていたのだ。そして母の目から見れば、友田順次は申分のない私の未来の良人だった。

母と一緒に私の帰りを待っているとき、順次はたいいていレコードの音楽を聞いていた。母の手前、彼はつとめて苛だちを抑えようとしていた。一方母は、無言で順次をなだめようとするように、彼をそっと見守っていた。私に代って詫びようとでもするようなおどおどした気配もあった。だが母の気弱そうな微笑には、やさしい艶があった。二十歳で私を産んだ母は、まだ若く美しかった。私のためにとった順次への母の態度のやさしさに、私は軽い嫉妬をおぼえた。

あるとき順次と言いつつたあげく、私はつい口をすべらせた。

「そんなに怒ることないわ、あなただってお母様に好かれてること、しらないわけじゃないんでしよう」

「嘘をつけ」

彼はとっさに打消したが、彼の頬と耳朶にはさっと血がのぼった。その順次の見せた羞じらいは私をひねくれた気持にした。

母はもちろん、折にふれ私をたしなめていた。威丈高にではなく、懇願するような柔らかな声で咎めるのである。順次に出まかせな話をしてから数日後、いつもの調子で母にたしなめられたとき、私は小さく肩をそびやかした。私は青年の上氣した顔を思いうかべながら、意地悪げに言った。

「仕方ないわ、順ちゃんもお母様を好きらしいんだもの」

「なんてことをいうの、敦子ちゃん」と母は目を見張って私をみつめた。

やがて母は落着きのない容子で、低く早口に言った。

「あなたもお父様に似て来たわ」

私がなぜ母と許嫁にそんな真似をしたのか、私はいまいうことができる。三年前、私は二十二であつた。それは無分別な若い心がさせた気まぐれな悪戯(いたづら)だつた。

しかし母も許嫁も、私の悪戯を悪戯として笑つて受止めるだけのゆとりを持ち合せてはいなかつた。二人に嘘を言つたあと、ある夜、例によつて私が遅く歸つて来ると、内玄関に順次の靴があるのに、居間からは音楽が聞えなかつた。私は漠然とした予感から、そつと居間のドアをあけた。母と友田順次は珍しく長椅子に並んですわつてゐた。私の気配に、二人は同時に立ち上つて私を見た。母はうろたえたように素早く目を伏せ、順次はけわしく光つた目で私を見つづけた。母はやや蒼褪(あせな)めていた。そして順次の目は泣いたあとのように赤く充血してゐた。

そのとき私は、さり気なく笑いながら二人に話しかけてもすればよかったのである。彼等はまだ、私のやさしい母、私の忠実な許嫁へもどれる状態だつたにちがいない。だが私は、二人を見るなり立ちすくみ、無言で居間を飛び出してしまつたのだ。

私が順次への執着に苦しみだしたのはそれからである。私への疑いから順次がひたむきになつたように、私も母と順次の接近で、にわかには彼が大事になつてきたのである。月並な、だがごく自然な恋のからくり、私も他愛なく落ちてしまつたのだ。すると滑稽にも、私はこれまでの遊び相手にすこしも魅力を感じなくなつた。しかしこれまで順次を苛だたせつづけて来た手前、彼に素直に苦しみを告げることなど思いもよらなかつた。かえつて私の外出の度数は多くなり、帰宅の時間は遅くなつた。帰宅したとき、順次が来ていそうな気配があると、私は決して居間へ顔

を出さなくなった。

そのような私の態度は、当然、母と順次を一層近附けていった。日中も、勤先を抜け出して坂道を登って来る順次の姿を、私は二階の自分の部屋の窓からときどき見かけた。母も私と顔を合わせると悲しそうに笑いかけ、たちまち目を伏せた。母の顔には次第にやつれが目立っていった。母が友田順次と接近していったのは、もちろん私のせいだけではない。母は父と平凡な見合結婚をし、父との生活を諦めていた筈である。父に愛人がいることを、私も小さいときから漠然と気づいていたし、母は私以上に知っていたにちがいない。私は母の恋の直接の動機をつくったにすぎないのである。

その考えは私の苦しみをまぎらわすために役立った。だが私は、苦しさを忘れようとするばかりで、よもや母が安西家を出て行くようになるとは思ってもみなかった。

母がいなくなった日のことを、私ははっきしておぼえている。

その夜、十一時近くに帰って来た私に、母が外出したままもどらないことを女中がおしえてくれた。

「お父様いるの？」と私はとっさに急ぎ込んできた。

「さきほどお帰りです」

「おしえたの」

「はあ」

私が蒼くなったのは、一人になってからである。女中の目を気遣いながら、私は友田家へ電話をかけた。順次はいなかった。母が順次と一緒に旅へ出たことを私は疑わなかった。おどろきと

怖れのために、私のからだは二階の部屋へもどつてからもこまかくふるえつづけていた。その怖れと予想を、私は誰にも訴えることはできなかった。弟はその年の春から札幌の大学に入って家にはいなかったし、父にはむろん打ちあける勇気がなかった。

私はベッドと窓のあいだを、落着きなく行き来して夜を明かした。十月の半ばで、落葉が一晩中はげしく窓をたたいていた。ときによると、落葉の音は驟雨しゅううの音のようにも聞えた。だが月はいかたがたであった。窓際へ行くたびに、私は階下の父の部屋の窓を見おろした。父と母の寝室であつた部屋の窓からは、スタン드의あかりらしい弱いあかりが漏れていた。陰翳いんえいの深く見える橙だいだいいろ色のあかりは未明まで消えなかった。

翌日も落葉は前庭を埋めつづけ、私の怖れは消えなかった。予想が現実になつたのは夕暮れである。順次が函館から打つた私宛の電報がとどいたのである。母を岡山まで送りとどけるから心配しないように、という意味の電文だった。母は岡山の果樹園の娘で、母の父、つまり私の母方の祖父はまだ岡山で仕事をしていたのである。しかし、私が順次の電文をそのまま受取らなかったのは当然である。

父の帰宅は、その夜も夜半に近かつた。私は意を決して、父の書斎へ電報を持って行った。父は着替えもせず、肱掛椅子ひじかけいすにもたれて煙草を吸っていた。私がおずおず差出した電報を、父はゆっくり読み終えた。父の表情はほとんど変らないようだった。だが私は、父をまともに見つづけることができず、小卓上の煙草ケースから煙草を抜き取った。私の手はふるえて、火は容易に煙草につかなかつた。父が無言で火を差出してくれた。そのとき私は、父が私とおなじように電文をそのまま受取つてはいないことをさとした。

私と父は、お互いの顔を見ずに、長いこと無言ですわっていた。やがて父は、私の背を軽く抱えるようにして、私を書斎から連れだした。父は書斎のドアの前で低い静かな声で言った。

「早くお寝み」

父の目はすこし笑っていた。それは父が、私に示した最初のやさしさだった。

以後、私と父が改まった話題で話し合わなくなったのは当然である。私と父とのあいだに、変わった話題が持ち込まれるとしたら、それは私の新しい縁談か、母の消息か、父の再婚の話くらいしかなかったからである。父も私も、その三つの話題にはふれたがらないお互いの心をよく知っていた。

大事な話にふれなかったのに、私が父と母との離婚を知ったのは、岡山から来る手紙に気を配っていたせいである。岡山からはじめて父宛の手紙が来たのは、母が家を出て行ってからほぼ二ヶ月後であった。母からの手紙ではなく、差出人は果樹園主の祖父であった。安西英輔殿、という表書の端正な筆字が、祖父の古風な気質を物語っていた。

母が安西家へ帰る日をのぞんでも無駄なことを、私は充分知っていたが、祖父からの手紙はやはり私の気にかかった。私は父の留守をねらって父の書斎に忍び込み、祖父の手紙をさがした。手紙は書斎の机の引出しの中に、無造作に投げ込まれてあった。父は祖父の手紙を、私の盗み見を予想して、わざと私の目につきやすい場所に置いたのかもしれない。手紙を盗み見することによって、父と母とのあいだのこの結着を私に知らせようと計ったのかもしれない。

祖父の手紙は、いさきかも父を責めてはいない、鄭重きわまる謝罪状だった。祖父はひたすら